

一つの伝記論 (6)

安 達 肆 郎

目 次

序

一

二

三 利用された伝記

四 好事家の伝記

五 文学的伝記

六 歴史的伝記

七

八 自己目的・自足的伝記 (1)

九 自己目的・自足的伝記 (2)

十

十一

十二

十三

} 本号

十二

小論の冒頭に述べた様に、小論の窮極の目的は、「本来の伝記に関する三つの基本的問い」に答えることである。小論第二章から第十一章までは、要するにその為の準備である。⁽¹⁾

さて、われわれは前章で「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」の実例をあげ、二つの実例に共通した「本来の伝記」一般の特徴（特殊な性格、独得の諸要素等）を解明したので、いまやその「実例」を手掛りとし、その「解明」の成果を踏まえて、「本来の伝記に関する三つの基本的問い」に回答することができる。

1

さて、「本来の伝記に関する基本的問い」の第一は、「伝記」の成り立ちに関する問いである。即ち、「伝記は本来、人間精神からいかにして(どの様なところから、どの様にして)生れたか——」である(第一章4節参照)。

この問いは要するに、「本来の伝記」が生れる原動力、その際の筆者の希い(直接の動機)と生れ出る過程を問うている。具体的にいうと、「本来の伝記(自己目的・自足的伝記)」が書かれる場合、その原動力となったのは何か、それを書く筆者の直接の動機(希い)は何か、また、どの様な操作(手続き)で伝記が生れ出るか、その次第を問うているのである。以下、順次に右の三つの問いに答えてゆこう。

まず「原動力」であるが、「本来の伝記(自己目的・自足的伝記)」は、前章までの事例についてのわれわれの究明の結果によれば、世に行われている「各種の伝記」の様に、直接主人公とは関係のない筆者の勝手な「目的」や「好み」「狙い」等から生れるのではない。「本来の伝記」は、主人公そのひとに対する筆者の直接の関心から生れる。といっても、例えば、主人公に対する興味、同情の様な表面的な、従って主人公の一面に対する関心から生れるのではない。主人公そのひと(全人)に対する筆者の全人をあげての傾倒から始めて生れる。結局、筆者の直接主人公そのひとに対する全人をあげての傾倒が、筆者に「本来の伝記」を書かせる原動力である。

前章で、われわれは筆者のこの様な、直接主人公そのひとに対する全人をあげての傾倒を、主人公との「出逢い」と呼んだ。「本来の伝記」の原動力は筆者の出逢い(主人公との出逢い)経験である(第八章6節参照)。

「出逢い」は、筆者のところに厳しい緊張をもたらすが(後述、第十六章参照)、それが筆者と伝記の主人公との間に様々の思わく(「目的」「好み」「狙い」等)が入りこむのを防ぐ。また、それが筆者をして、主人公に対する同情、興味等の軽い一面的関心を超えさせる。こうして「伝記」は始めて、それらの「思わく」の為ではない、また様々の一面的関心の為でもない「自己目的・自足的伝記」となることのできるのである。

結局、主人公そのひとに対する全人をあげての傾倒(出逢い)が、筆者をして各種の思わくや伝記の主人公に対する一面的関心を超えさせ、伝記はそれによって始めて自己目的・自足的となる。これらのことを、われわれは小論第三章以下(特に第八章、第九章)で実例について確かめてきた。

2

「本来の伝記」の人間精神からの生れ(素性)をより具体的に示す為に、われわれはもう一步ふみこんで、そもそも「本来の伝記」の原動力となった筆者の「出逢い経験」そのものの内容と生れを示さねばならぬ。

(「伝記」の素性を明らかにするには、伝記の筆者の「出逢い経験」ではなくて、そもそも「出逢い」という人間関係そのものの性格やその構造を哲学的に解明すべきだ、といわれるかも知れない。然し、その様にすることは、「伝記論」の領域、立場を超えている。

「伝記論」が、ここでなお解明すべきは、先述の様に、「本来の伝記」の生れの具体相、従って「本来の伝記」の原動力となった限りの出逢い、即ち「本来の伝記」の筆者の出逢い(主人公との出逢い)経験であって、一般に「出逢い」自体ではない。具体的にいえば、「本来の伝記」<自己目的・自足的伝記>の実例に体现されている限りの筆者の出逢い経験であり、その内容及び生れである<小論、第十一章参照>。)

a. ここにいう「出逢い経験」は、先に「本来の伝記」(「自己目的・自足的伝記」)の実例について確認した限りでは(第八章参照)、筆者が主人公とめぐりあい、主人公によって、存在の根底から揺り動かされ、揺り動かされつづける、そういう意味で彼を自己存在の根底に担うことである。

詳言すれば、筆者が主人公とめぐりあい、全人をあげて彼そのひとに傾倒し、終に、主人公そのひととの対立を超えて(対立を排除して、ではない——後述第十三章参照)、彼そのひとに直接する(自己存在の根底に担う)ことである(第八章6節参照)。

(「本来の伝記」の筆者のこの様な「出逢い経験」は、一面、宗教信仰者の経験に類似する。その為か、『ベートーヴェンの生涯』の筆者ロマン・ロランは、自分がそれを書く原動力となったベートーヴェンとの「出逢い経験」を、

「人間に対する人間的信仰」と呼び、また『ベートーヴェンの生涯』を、「ベートーヴェンに対する信仰の証」と呼んだ(前出、『ベートーヴェンの生涯』18頁、12頁、後述第十四章5—9節及び註13参照)。

b. この様な「出逢い経験」は、どこから生じるのであろうか——。

われわれは、この点についても、先に『ベートーヴェンの生涯』の筆者ロマン・ロランの場合について、それ(「出逢い経験」)が、突然におこった、当事者ロラン自身にも殆ど信じ難い幸運な経験であることを確かめた(第八章6節)。

ロランは、自分自身に、その幸運な経験を確かめる(出逢い経験を反芻して確かめる)ために、その経験の直後にパリを離れて、ベートーヴェンのおもかげを求めて、彼の友人に会い、彼の作品に触れようとしたし、抑々『ベートーヴェンの生涯』を書いたのも、一つにはベートーヴェンとの出逢い経験を確認するためであった(第九章1節参照)。

結局、実例について究明した限りでは、「本来の伝記」の原動力となった主人公との「出逢い経験」は、筆者の幸運によるのである。筆者自身のはからいによるのではない。「出逢い」は、幸運によって筆者に届けられる。その際、筆者の側に期待してよいのは、ただ「幸運」を受け止めるころの素地のみである。「本来の伝記」の筆者は、自ら(天性)その様なころの素地を具えた人であったに違いない(後述、第十四章8節参照)。

3

「本来の伝記」の原動力は、筆者の主人公との上述(a)の様な「出逢い経験」である。

とはいえ、実際には純粋にその様な「出逢い経験」のみを原動力とする伝記は稀である。

「出逢い経験」は、筆者のところに強い感動を与え、強い緊張を齎すが、然し、この「緊張」は不安定で筆者のころは不純化しやすい(後述参照)。実際に、われわれが「本来の伝記」の実例としてあげた伝記においても、「出逢い」の緊張の弛みに乗じて、筆者の種々の思わくが、彼の心中に入り込んでいた。その痕跡は、筆者が伝記を書く「希い」の中にさえみられる(第九章1、

(2)
2 節参照)。

また、こうして、入りこんだ筆者の種々の思わく(「目的」「狙い」「好み」等)の為に、始めの「出逢い経験」が不純化し無力化し終に、「原動力」の地位を思わくにとって替られ、その結果、その伝記が自己目的・自足性を喪った場合も多いのではないか——⁽³⁾。

とまれ、「本来の伝記」である為には、伝記は、たとえ純粹にではなくとも、基本的には筆者の前述の様な「出逢い経験」(主人公との出逢い経験)を原動力としなければならない。

ここで、もう一つ、上述の場合とはやや異なるが、やはり原動力としての「出逢い経験」の変貌のために生じる所謂「一辺倒」「一体化」を省みておかねばならぬ。

ここにいう「一辺倒」は、伝記の筆者が、自己を喪って主人公のうちへ吸収されること、「一体化」は反対に、筆者が伝記の叙述に際して、主人公のうちへ、自分の思想、感情を投影し、結果的に主人公との対立を排除して、主人公を自分のうちへ吸収することである。

どうしてこの様なことがおこるのか——。

私見では、その原因は、前述の場合とはやや異なる。詳言すると、a. ここでも最大の原因はやはり、「出逢い経験」を原動力としていた筆者が、こころの緊張を喪ったために「出逢い経験」が変貌することである。b. 然し、この場合は、そこへ入りこんできた他種の思わくのために「出逢い経験」が不純化するとか無力化するというのではなく、「出逢い経験」が変質し、平板化し、単純化する(後述参照)のである。c. しかも、この場合は、先の場合と違って、その「変質した出逢い経験」が、依然原動力の地位を保ちつづける。

では、ここにいう「出逢い経験」そのものの変質(平板化、単純化)は、いかにしておこるのか——。

先にみてきた様に、「本来の伝記」の筆者と主人公との「出逢い経験」は、本来は、文字通り、自立したひと(筆者)とひと(主人公)とのめぐりあいである。

「出逢い経験」において、筆者は主人公へ傾倒するが、この「傾倒」は、後述の様に筆者が自分の主人公をみる眼（文学者、歴史家の様な傍観的立場）をこえて人となり、人をこえて自立者になり、終にひと（全人）となって主人公そのひと（全人）と対立し、しかも、その対立を超えて（対立を深め、対立を媒介する媒介者を撥無して）、自己の全人をあげて主人公そのひとに直接する（主人公を自己存在の根底に担う）ことを意味する（2節、5節参照）。

結局、「出逢い経験」（傾倒）は、「一辺倒」「一体化」の様に主人公との対立を排除するのではなく、対立をのり超えて（止揚して）、主人公に直接することを意味する（前出拙稿「伝記作者クセノポンの経験」IV、pp. 23-28）。

然し、「出逢い経験」を原動力として伝記を書く場合、筆者は、ややもすれば、こころの強い緊張に耐え切れず、また一つには、主人公との「直接」を意識しすぎて、前述の様な、対立を排除した主人公との平板で単純な「一体化」、「一辺倒」の姿勢に陥るのである。

この様な姿勢は、「出逢い経験」を原動力とする本来の伝記者の姿勢の墮落といわねばならぬ。上述の様に、「出逢い経験」の核心は、自立したひと（筆者の全人）とひと（主人公の全人）との対立（めぐりあい）であり、対立を超える（止揚する）ことであるからである。

この様な筆者の姿勢の墮落によって、「伝記」そのものは、主人公そのひとに対する筆者の「人間的信仰の証」という本来の性格と気品を喪って低俗化し、その「自己目的的・自足性」は、いのちのない形骸と化する。（第十五章）

後述する様に（第十三章）、スイスの歴史家ケーギ(W. Kaegi)は、傾倒する師ブルクハルトの伝記を書いた自分の経験にも鑑みて、この様な「伝記者」の立場、根本的な姿勢の墮落を強く戒めている。

（伝記の読者の中にも、「出逢い経験」に基づく筆者の姿勢（共感）と、「一体化」の姿勢とが外形上（主人公への直接という点で）似ているために、「出逢い経験」を原動力とする伝記の叙述を、筆者と主人公との一体化を示すものと誤解する場合もある様である。）⁽⁴⁾

原動力としての「出逢い経験」の前述の様な内容、性格が、「本来の伝記」

を構成する他の諸要素（筆者の動機、叙述の内容、叙述の仕方等）のあり方、性格に決定的な影響を及ぼす（というより、それと不可分である）ことは、いうまでもない。

「出逢い経験」と伝記の他の諸要素との、この様に密接な（不可分の）関係は、具体的には「諸要素」の考察に際して、その都度示す。

4

主人公そのひとに対する全人をあげての傾倒（「出逢い経験」）は、筆者をして「本来の伝記」を書かせる原動力ではあるが、筆者が「本来の伝記」を書く直接の動機ではない。では、「直接の動機」は何か——。

「出逢い」の緊張によって、筆者の各種の思わくが超えられたところに、不可避的に且つ直接に筆者の全人をあげての希いが生じる（第九章3節参照）。この「希い」は、右の様なその「生れ」からみて、ただ「出逢いの事実」という他ないが（第九章3節参照）、それが、筆者が「本来の伝記」を書く直接の動機となる。

先に事例についてみた様に、この「希い」の一つは、主人公との「出逢い」を、自分自身に確かめ、また、人々にもそれを示したいとの希い、もう一つは、自分が出逢った主人公そのひとを、他の人々にも伝えたいという希いである。

この様な「二つの希い」は、「本来の伝記」の筆者独得のもので、世に行われている各種の伝記の筆者が抱く希いとは異質であることは、小論第三章以下における「各種の伝記」の分析の際、事例についてみてきた通りである。各種の伝記の筆者が抱く希いは、筆者の勝手な「目的」「狙い」「好み」等、「出逢い経験」とは全く異なった筆者の思わくから生れたもの、従って素性からいえば、「出逢い」の緊張が緩んだ心情の中で生れ育ったものである（第十六章参照）。

これに対して右述した「二つの希い」は、正に「出逢い」の緊張そのものが生み出したもの、また緊張の中で育ったものである。前者と後者は、いわば生れも育ちも異なる。

尤も、「二つの希い」は、常にその純粋性を保っているとは限らない。伝記を書く原動力が基本的には「出逢い経験」であっても（従って「二つの希い」が直接の動機であっても）、少しでも「出逢い経験」の緊張が緩むと、それに

乗じて筆者のところに他種の希いが入りこんで来るだけでなく、「二つの希い」そのものが変貌して、そこに不純な要素が混じることとなるからである。⁽⁵⁾

また、その不純さが極端になると、伝記は外形は「自己目的・自足的」であっても、内容は、饒舌でよそよそしい、雑駁で迫力を欠いた所謂「物語り風伝記」になる(第十二章の註8及び第十五章参照)。

反対に、筆者の思わく——例えば、ある種の「思い出」の様に、主人公をなつかしむ感情を原動力とし、直接には、故人を偲ぶよすがを得たいという希い(動機)から出発しても、その「動機」(思わく)が昇華され純化され、筆者のこのころの緊張が高まると、それを動機とする「伝記」(「思い出」)は、終に、その原動力となった思わく(感情)自体も昇華されて、主人公そのひとへの傾倒となり、自己目的・自足的伝記となる。⁽⁶⁾

5

最後に、右述した「二つの希い」を結びつけて、両者を同時に達成する一つの操作が「主人公の生涯を記す(bios-graphēin)」である(第九章3節参照)。これによって「伝記(biographia)」が始めて生れ出る(姿を現わす)。

では、「主人公の生涯を記す」ことによって、「二つの希い」は、どの様にして、また、どこまで達成されるのか——。

その経緯は、部分的・断片的には、先に「本来の伝記」の実例を分析した際にも述べたが、ここで改めて、先にあげた「本来の伝記」の叙述(その実例)に即し、且つその「叙述」の裏にひそむ筆者のこのころにも立ち入って(それを推量して)、「経緯」の全体を省みよう。

まず、「主人公の生涯を記す」という操作は、具体的にはどうすることなのか——。また、それによって「第一の希い」(「主人公そのひととの出逢いを自分自身に確認し、人にもそれを示す」という希い)は、どの様にして達成されるのか——。

a. 「本来の伝記」の筆者(その実例)の場合、ひとの「生涯を記す」とは、主人公の行跡や事績をただ見て記すことではない。⁽⁷⁾

「行跡」や「事績」は、人が生きた跡、なしとげたことに過ぎぬ。その様な「跡」や「なしとげたこと」をただみて記すだけでかの「希い」が達成される筈

がない。

前述の様に、主人公そのひとに出逢い、その緊張の中で、その「出逢い」の確認を希う筆者には、そもそも主人公の行跡や事績をただみている様な余裕も態度も立場も存しない。よりの確に言えば、筆者はこの際、「出逢い」の緊張によって、「ただ見る」立場、態度を超えているのである。次にその状況を分析してみよう。

(1) 筆者はここでは、まず単なるみる眼を超えて人となり、人を以て、主人公の行跡、事績に主人公の生き身を、彼の脈動を息吹きを感じる。筆者にとって行跡、事績はただの事実（人が生きた跡、なしとげたこと）ではなくて血の通った人間（主人公）の生きざまである。

(2) 然し、ただの「生きざま」ではない。筆者はここではただの「人」を超えて自立者となる。自立者として、筆者は、主人公の生きざま（行跡、事績）に主人公が自立者として自ら選んだ独得の生き方を感じ得る。

(3) 筆者はここでは、ただ「自立者」ではない。「主人公との出逢い」の緊張によって、彼はいま、ひと（全人）となる。ひととなった筆者は、主人公の行跡、事績のおくに、自分が選んだ固有の且つ一度きりの生涯を生きる主人公そのひと（全人）を共感する。行跡、事績はこの際、筆者にとって、それを生きる主人公そのひとの固有の且つ一度きりの生涯の一環である。そして、「生涯の一環」を生きる主人公「そのひとを共感する」とは、まず主人公の身（ひと）になって彼の「生涯」を迎える（生きる）ことである。筆者はいま、主人公の行跡、事績を記すことの半面で主人公の身になって彼の固有の且つ一度きりの生涯を迎えて（生きて）いるのである（後述参照）。

b. さて、主人公の「生涯を記す」とは、「本来の伝記」の筆者の場合、ただ主人公の行跡、事績ばかりでなく、生涯を生きる主人公の喜び、悲しみ、驚き、怖れ、悩み、怒り、憎しみ、蔑み、後悔等々様々の思い、また彼の迷い、諦め、絶望、決断等々心の動きをも記すことである。（われわれが先に「本来の伝記」の実例としてあげた、ロマン・ロランの『ベートルヴェンの生涯』にもそれが記されている。）

さて、主人公のこれら様々の「思い」「心の動き」は、いま「出逢い」経験

の厳しい緊張のうちにある筆者にとっては、もはやただ外からみて、それらを感じずるだけ、ただそれを楽しむだけ（好みの対象）、ただあじわうだけ（例えば文学的関心の対象）ですますことができる底のものではない。この場合の筆者にとっては、それらの「思い」「心の動き」は、ただそれだけのものではなくて、固有の且つ一度きりの生涯を生きる主人公そのひと（全人）の固有のいのちの生の現われ、いわば彼そのひとの固有の魂の真実である。

つまり、「出逢い」の強い緊張の中にあるこの場合の筆者は、主人公の様々の「思い」「心の動き」を記すことにおいて、実は、彼自身の単なる感情、好み、文学的関心等々の粹を突き抜けて、おのれのいのち、魂で主人公そのひとの固有の且つ一度きりの魂の真実を共感しているのである。

こうして、主人公の固有の「魂の真実」を共感するとき、筆者はもはやただ記しているのでも、ただ感じているのでもない。心の上では自分も生涯を生きる固有の魂となり、主人公そのひとの身になって、固有のいのちをこめて生きる主人公の一度きりの生涯を自らのいのちをこめて迎って（生きて）いるのである。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

この様にして、主人公の生涯が迎られるにつれて、叙述の行間から、その生涯を生きる主人公そのひとが、いのちをえて、その生涯を迎る筆者そのひとに対して立ち現われる。かくて筆者は、主人公そのひとに出逢う（再逢する）。筆者はいまや独りではない。主人公を自己存在の根底に担う。

c. 結局、主人公との「出逢い経験」を原動力とする「本来の伝記」（「自己目的・自足的伝記」）の筆者の場合、主人公の「生涯を記す」とは、表面では、ただ主人公の「行跡」「事績」をみて記し、主人公の様々の「思い」様々の「心の動き」を感じずるまま好むままに記す様にみえても、実は、「行跡」や「事績」の底に潜む主人公固有の生きざま、生き方を、固有の生涯を、自分のひと（全人）を以て迎り、更には主人公の「思い」「心の動き」の底に「固有の生涯」を生きる主人公そのひとの固有のいのち（魂）の真実を、おのれの魂を以て受け止め、最後に、固有のいのちをこめて生きる主人公の一度切りの生涯を、自らのひと（全人）のいのちをこめて迎り、終に、そこに自分自身（ひと）に対して立ち現われる主人公そのひとと出逢う（再逢する）ことである。⁽¹⁰⁾

(かくて、「本来の伝記」の叙述には、主人公そのひとの独得の「生きざま」、固有の「生き方」、固有の且つ一度きりの「生涯」に対する筆者の共感が、また、主人公固有の「魂の真実」に対する筆者そのひとの魂の共感が、ひいて、主人公そのひととの再逢の感銘がこめられることになる。

この様なものとして、「本来の伝記」の叙述は、文学作品、歴史記述<その他各種の伝記>等の叙述とは異なった独得の性格をもつことになる<第十四章、第十六章参照>。

ロマン・ロランが、自分が書いた『ペートル・ヴェンの生涯』を、主人公ペートル・ヴェンに対する「信仰の証し」と呼んだのも、またロランの親友アンドレ・シュアレスが、ロランの『ペートル・ヴェンの生涯』を、「福音書を書く様な態度で書か」れたもの、と評したのもそのためであろうか——<第十章の註3、第十三章4節、第十四章10節参照>。

(ここに分析して示したのは、典型的な「本来の伝記」の、典型的な筆者が、主人公の「生涯を記す」際の姿勢とこころの動きの大筋である。「本来の伝記」の筆者の場合でも、「生涯を記す」筆者の姿勢、こころの動きは、実際には、いつもこの様に純粹でも、またいつもこの様に緊張しているわけでもない。不純な要素、余分な要素を含み、またこころの緊張が緩んで、偏った構造、性格を示す場合もある⁽¹¹⁾。)

とまれ、「主人公との出逢いを自分自身に確認し、人にもそれを示したい」という筆者の「第一の希い」が、これによって達成される。

というのは、主人公そのひととの前述の様な「再逢」は、筆者にとって、主人公との「出逢い」の確証(認)以外の何ごとでもないし、また右述の様に、「本来の伝記」の叙述には、筆者の主人公との「出逢いの感銘」がこめられているが、人々(「本来の伝記」の読者)は、「叙述」にこめられたこの「感銘」を同感することによって、筆者と主人公との「出逢い」を感得するに違いないからである(第十四章参照)。(読者が、筆者と主人公との「出逢い」を感得することは、然し、読者自身が主人公に出逢う<共感する>ことではない——第十四章5節参照。)

では次に、右述の様な「生涯を記す」という一つの操作によって、どの様に
して、また、どの点まで「本来の伝記」の筆者のもう一つの希い（「自分が出
逢った主人公を他の人々にも伝えたい」との希い）は達成されるのか——。

この点については、第十四章（「本来の伝記」に関する第二の問い〈「伝記は
人間にとって如何なる意味をもつか」という問い〉に対する回答）で、読者
の側から詳述するので、ここでは、右の希いが達成される種々の道筋の中、代表
的な道筋について、その要点を示すに止める。

（「本来の伝記」の読者が、主人公に出逢う〈主人公そのひとを共感する〉
に至る途は幾通りもありうる。ここでは、その中の代表的な一つの途について
述べる。）

1. 右述した筆者の「第二の希い」にいう「人々（読者）に主人公そのひと
を伝える」とは、a. 主人公に出逢った自分（筆者）の経験を人々に伝えるこ
とではなくて、出逢った主人公そのひとを伝えることである。b. 「主人公そ
のひとを人々に伝える」とは、人々（読者）をして、主人公そのひとに出逢
わせることであるが果してその様なことができるであろうか——。

2. ここにいう「出逢い」（読者と主人公との出逢い）は、自立者たる当事
者（この場合は読者）が、主人公とめぐりあい、全人をあげて主人公そのひと
に傾倒し、主人公によって存在の根底から揺り動かされ、終に、主人公そのひ
ととの対立を超えて直接し、彼そのひとを自己存在の根底に担うことである
（第八章6節、第十二章2節参照）。だからここにいう「出逢い」が、他者によ
って押しつけられたり、与えられたりする筈がない。といっても、「出逢
い」は、先に実例について確認した様に、当事者が自らのほからいでなし得る
ことではなくて、幸運によって、いわば彼に届けられる経験である——（第八
章6節、第十二章3節、第十四章参照）。

してみると、「本来の伝記」の筆者が、「第二の希い」を達成するためにな
しうるのは、結局、ただ、人々（読者）が主人公に出逢うという幸運にめぐま
れる縁を含んだ、いわば「出逢いの場」を提供することのみである筈。

3. 実際に、先に実例を分析した限りでは(第九章3節、第十二章5節)、「本来の伝記」の叙述は、右の「縁」となりうる底の独得の内容、性格を具えている。

さて、私見では、「本来の伝記」の叙述が、読者と主人公との出逢いに関して提示しうる「縁」は二種ある。

a. 前述の様に(第十二章5節)、「本来の伝記」の筆者においては、「生涯を記す」ことは、ただそれだけのことではなくて、主人公そのひとの固有の生き方、固有の生涯を、またその「生涯」を生きる主人公そのひとのいのち、魂の真実を、おのれのいのち、おのれの全人をあげて共感することである。やがて、主人公そのひとに再逢することである。筆者のこの様な主人公そのひとへの「共感」、主人公との「再逢」が、「生涯を記す」叙述に何の跡も残さぬ筈がない。「叙述」には、その「共感」「再逢」の際の筆者の深い思い(感銘)がこめられる(第十二章5節参照)。

こめられたその「感銘」が、「叙述」を内から照らし、それを生気づける。こうして「本来の伝記」は、読む人に迫る強烈な迫力をもつに至る。それは、読者のところを触発し、高め、終に彼の全人を捉えずにはおかない。

然し、これは筆者の経験(筆者の「共感」、筆者の「感銘」)に対する読者の同感に他ならず、主人公そのひとに対する読者自身の共感ではない(後述第十四章2節参照)。

とはいえ、後述する様に、人々(読者)は、この「同感」を縁として、自分自身が主人公そのひとと出逢う幸運にめぐまれるに至るころの素地を具えることができよう(第十四章8節参照)。

b. 「本来の伝記」は、前述の様に、主人公の息吹き、脈動を、彼が選んだ独得の生き方を、彼の一度切りの固有の生涯を示している。また、固有の生涯を生きる主人公そのひとの魂の真実を深い感銘をこめて記している。

前述の様に、人々は普通、その様な「叙述」を、まず、そこにこめられた筆者の感銘にひきずられて、それを通して読む。即ち、その「叙述」を、主人公に対する筆者の共感の現われとして読む。主人公に対する感銘もいわば、ひとごと(他人事)として受けとめる。

然し、人々はやがて、その「叙述」を、そこにこめられた筆者の感銘を介さず、直接に、主人公そのひとの現われとして、深い感動を以て受けとめる。

直接主人公そのひとに対する読者自身の（もはや、ひとごとではない）この様な深い感動が、彼が主人公そのひとと出逢う（その様な幸運にめぐまれる）、もう一つの縁となるに違いない（第十四章9節参照）。

結局、人々（読者）が「本来の伝記」の主人公そのひとに出逢うのは、読者自身の幸運に俟つ他ないが（第十二章2節参照）、「本来の伝記」は、主人公の「生涯を記す」その叙述が、上述の様に、読者が出逢いの幸運にめぐまれる縁となりうるものを含み、それを人々に提示することによって、人々（読者）が主人公そのひとと出逢う場となる。

結局、主人公の「生涯を記す」ことによって、——それによって「本来の伝記」が、主人公と読者との上述の様な「出逢いの場」となる限りにおいて——「本来の伝記」の筆者の第二の希い（自分が出逢った「主人公そのひとを人々に伝えたい」という希い）も達成される。⁽¹²⁾

前節での考察の結果と併せると、結局、主人公の「生涯を記す」という一つの操作によって、「本来の伝記」の筆者の「二つの希い」は結合されて、同時に双方とも達成される。

以上、「伝記は本来、人間精神から如何にして（どの様なところから、どの様にして）生れるか——」という問いに答えるために、前章までの検討によって、その存在を確認した「本来の伝記」（自己目的・自足的伝記）の実例を手掛りとし、また前章で解明した「本来の伝記」一般の特徴を踏まえて、1. 「本来の伝記」が書かれる原動力となったのは何か——。2. それを書く筆者の直接の動機（希い）は何か——。3. どの様な操作（手続き）で伝記が生れるかを、筆者のところに立ち入って示した。

以上に示したところをとりまとめていけば、「伝記」は本来、筆者のころ

から、基本的には、⁽¹³⁾

1. 筆者の「主人公との出逢い経験」を原動力とし、
2. その「出逢い経験」から直接、不可避的に生じた「二つの希い」を直接の動機とし、
3. 最後に、その「二つの希い」を達成するために「主人公の生涯を記す」ことによって生れるのである。

今日世に行われている殆どの伝記（所謂「各種の伝記」）の成り立ちが、ここに示した成り立ちと全く異なることは周知の通りである（前出「伝記の魅力」参照）。

然し、それにも拘らず、「各種の伝記」が今日でも決して単なる文学の一ジャンル、単なる歴史叙述の一分枝等に成り切らず（成り果てず）、「伝記」としての命を保ちつづけ、人々（読者）の生活（生き方）に影響をもちつづける点などをみると、「各種の伝記」と「本来の伝記」とは、同じ「伝記」として、根底では、深いかかわりをもった同種の文化（同種のこころの所産）なのではないか、と思われる。

然し、もし、そうだとすると、「本来の伝記」と「各種の伝記」の、周知の様に全く異なった成り立ちを如何に解すべきか——。

「本来の伝記」と「各種の伝記」との、上述の様な性格の幽かな且つ微妙な類似を思うと、両者の成り立ち（人間精神からの成り立ち）が、全く無関係とは思われぬ。両者（「本来の伝記」の成り立ちと、「各種の伝記」の成り立ち）は一見全く異なる様にみえるが、それは姿かたちだけのことで、その実、両者のうちには同じ種の血が流れており、一方は他方の変種なのかも知れない。

とまれ、これらの「問題」の解明は、この章で試みた「本来の伝記の成り立ちに関する基本的問い」の解明と表裏の関係にあって、「伝記論」が避けて通ることができない課題の一つである。

それで、これらの「問題」については、断片的・抽象的・一般的には、これまでも小論のあちこちで触れてきたが、それらを取りまとめ且つ一步ふみ込んで、第十六章で改めて考究することにする。

十三

「伝記は本来、人間精神から如何にして生れたか」という、伝記に関する基本的問い（その第一）に対するわれわれの右述の様な回答は、——「本来の伝記」の実例が殆どみられず、実際に世に行われているのは、「伝記」の本来の姿から逸脱した所謂「各種の伝記」ばかりという今日の状況の下では——余りに現実の伝記の成り立ちからかけ離れていて、殆ど独断的妄想（「伝記」に関する妄想）と思われるかも知れない。そうでなくても、「回答」の内容は人々に奇異の感を与えるに違いない。

然し、識者達が折にふれて公にした、「伝記」または「伝記者」に関する文書（論稿、随筆等）の中には、間接に、「伝記」の成立過程、成り立ち（構成要素）、各要素の内容、性格等々に関するわれわれの「回答」が基本的には正しいことを証する底のものが含まれている。

それで、われわれの「回答」が独断的妄想として退けられ、無視されるのを防ぐ為に、また一つには、われわれの「回答」に肉付けして、その具体的な意味を明らかにする為に、次に、それら識者が公にした文書の主なものの摘要をあげてみよう。

なお、「伝記に関する基本的問い」の第二、第三に対する「回答」についても、右と同じ趣旨で、「回答」につづけて、それに関連して識者が公にした文書の摘要をあげることとする。

1

スイスの歴史家ケーギ (Werner Kaegi<1900-?>) は、その著『ブルクハルトの思考におけるヨーロッパ的視界 (Europäische Horizonte im Denken Jacob Burckhardts, Benno Schwabe & Co. Basel, 1962)』中の一篇「ブルクハルトと英語世界」(1960)の冒頭、次の様にいう。

「大小の伝記が順調に完成されつつあるとき、伝記作者に友好的な助言として提供される様々のおきての中には、肝に銘ずるに値するものが多い。『彼(伝記作者)は皮肉を慎むべきである。』と、たとえばハロルド・ニコルソン⁽¹⁾は言う、『彼は自分の主人公に対するのに、原則的に、かつ、くりかえし批判を

以てすることを自分の義務と心得てはならない。』ニコルソンは、この様な言葉、リットン・ストレッチ⁽²⁾に対する義憤のうちに書いた。ストレッチが自分の叙述する偉大なる故人をしきりにせせらわらうことに対する義憤のうちに——この際彼が引合に出したのは、伝記ものに練達のジョンソン博士⁽³⁾であった。『真の伝記は、読者を啓発し、鼓舞し、慰めるべきである』と博士は言った。また言う、『単に一時的でなく、永続的な影響力を持つ人物、また、著者と読者が基本的に尊敬の念を抱きうる人物についてのみ』真の伝記が書かれるのである、と⁽⁴⁾。

以上はすべて、まったくその通りである。しかも伝記作者は、時おり次の様にせざるを得ないことも事実である。即ち、自分の描く主人公からいくらか距離をおき、自分の仕事から身をひき、彼が彫刻する像を一度はいつもと違った側面から眺め、その像を有利な光から不利な光の中に移して、その場合にこの像がわれわれに如何に働きかけるか、果してそれでもその像がもちこたえるか否かを見るということである。⁽⁵⁾

2

周知の様に、ケーギは、ブルクハルトの弟子で、1935年、師のあとをついでバーゼル大学の正教授になったが、その頃から『ブルクハルト伝(Jacob Burckhardt, Eine Biographie, Bd. 6) <1945-77>』に着手した。(1982年、遺稿のかたちで第7巻が刊行された)彼はブルクハルトに深く傾倒し、ブルクハルトの未刊の遺稿まで研究して、師の精神、思想を明らかにしようとした(坂井直芳「ウエルナー・ケーギの横顔」<『ブルクハルトとヨーロッパ像』みすず書房、所収>参照)。

さて、ここに引用した「ブルクハルトと英語世界」は、1960年春、「英語世界と緊密な接触をもつ若干のブルクハルト崇拜者の希望に応じて生れた一つのスケッチである」という(坂井、ibid. p. 267)。とすると、ケーギがこの文章を書いたのは、年代からみて、彼が畢生の大著『ブルクハルト伝』を執筆の最中であったのである。

この様な事情も考えると、引用した文の冒頭の「肝に銘ずる……」は、実は『ブルクハルト伝』の筆者として、ケーギ自身が肝に銘じたという意味である

う。恐らくケーギは、自分の経験（「伝記」執筆の経験）に基づいて、自らジョーンソンやニコルソンの言葉を、伝記者として肝に銘ずべき忠告として受けとめたのであろう。

右に引用した彼の文章自体も、それが書かれたのが『ブルクハルト伝』執筆の途中であることを思うと、これは今後なお「伝記」を書きつづけねばならぬ自分自身に対する自戒の言葉であったのであろうか——。

ともあれ、引用した文章の意味を考えてみよう。

ケーギの文章の中には、伝記の主人公に対する筆者の二種の態度があげられている。ストレッチーの様に主人公に対する傍観的・批判的（嘲笑的）態度と、ニコルソンやジョーンソンが主張する様な態度と——。ストレッチーの態度は、自由な批判的態度であるが、これは主人公を対象化してみている点で傍観的というべく、歴史家が史上の人物に対する態度に近い。これに対して、ニコルソン等が主張する態度は、主人公をみているのでなく彼そのひとに傾倒し、彼そのひとを共感している点で共感的態度と呼ぶべきか——（尤も、筆者が主人公を尊敬し、彼から永続的影響をうける等々の関係を、直ちに主人公に対する傾倒〈共感〉とはいえぬ。傾倒は、その様な関係の根源をなす、ひととひととの全人をあげての出会いである。第十二章1節参照）。

ところで、問題のケーギの忠告は、この後者に対するものなのである。即ち、ケーギはニコルソン等の、伝記者は「共感的態度」をとるべしとする主張を、「すべてその通りだ」と容認しつつ、然も共感的態度をとる伝記者も「時には」、「主人公から距離をおき」、「自分の仕事から身を引き」、「主人公の像を有利な光から不利な光の中に移して」、「その場合にもこの像が……われわれに如何に働きかけるか、果してそれでもこの像がもちこたえるか否かをみる」様にと忠告するのである。

ケーギのこの様な忠告は、ニコルソン等の「共感的態度」に対する彼の次の様な鋭い洞察と、それへの批判から生じたと思われる。ケーギによれば、主人公に対して伝記者が「原則的¹に且つくり返し批判²を以てする（即ち、基本的³に且つ終始傍観⁴的批判⁵的態度をとる）」のは適當ではない、とするニコルソンの

主張は正しい。然し、ニコルソンが主張する共感的態度は、ややもすれば傍観的批判的態度を全面的に排除し、それと対立する態度になり易い。もし「共感的態度」がこの様な態度になると、それは実質的には容易に主人公に対する感情的・盲目的一辺倒に墮してしまふであろう。ケーギは、この様な「一辺倒」の姿勢を伝記者はとるべきではない、と考える。ケーギによれば、伝記者は基本的（原則的）には「共感的態度」をとるべきだが、それは歴史家的傍観的批判的態度を全面的に排除し、それと対立する底の態度ではなくて、歴史家的批判的態度をのりこえ、それを一要素（契機）としてその内に含んだ態度である筈なのである。（歴史家の、目を以てする態度に対して、全人を以て主人公に対し、主人公との対立を徹底し、それによって却って主人公に直接する態度。）

ケーギは『ブルクハルト伝』を書いた（なお書きつつある）自分の経験から、ニコルソンやジョンソン等、「伝記」に精通した人々の、「伝記者は主人公に対して、基本的には共感的態度をとるべきだ」という助言を肝に銘じ、それに全面的に賛同した。「以上はすべて全くその通りである」という彼の言葉がそのことを証する。

しかも、敢えてこの様な文章を書いたのは、ケーギが、歴史家として、ニコルソン等のいう「共感的態度（傾倒）」が変貌して、実質的には主人公への「一辺倒」に墮することを強く恐れたからであろう。⁽⁶⁾

以上の様に解してよければ、この文章は、歴史家ケーギが、「伝記者」に対する先達の忠告を肝に銘じ、そのうえ『ブルクハルト伝』を書いた自分自身の経験にも照らして、世の伝記者に与えた貴重な忠告である。われわれはここに、「伝記」及び「伝記者」に関する彼の見識をうかがうことができる。

（伝記者の「共感的態度」と所謂「一辺倒」の誤りについては、小論第十二章3節参照。）

3

有名な『イエス伝』の筆者ルナンは、『イエス伝』の最後の章で次の様にいう。

「そもそも、われわれにイエスの姿を伝えた福音書記者たち自身が、その語る人物よりもずっと以下であるので、彼の高さにまで及ばないで、始終、彼を

描き損うているのである。彼等の書いたものは、欠陥と誤解に満ちている。一行毎に、崇高な美の原作が、編者たちの手で偽られているのが見られる。彼等は、この原作を解しえないのである、そうして、思想を半ばしか捕ええないので、これに彼等自身の思想を代用しているのである。要するにイエスの性格は、伝記作者の手で美しくせられるどころか、小さくせられた。批評(家)は、イエスの真の姿を見ようとするなら、弟子たちの凡庸な精神から生じた一連の誤解を遠ざけることが必要である。弟子たちは、イエスを、自分たちの考える通りに描いた、そうして、往々、彼を偉大にするつもりで、実は小さくしてしまつたのである。⁽⁷⁾

この文章は、一見、ルナンが、イエスの伝記の読者に対して、主人公イエスの真の姿を明らかにするには、伝記の筆者の凡庸な精神から生じた誤解を取り除く様にせねばならぬ、と戒めている様にみえるが、然し、これを書いたルナンの意図は、それだけではなさそうだ。恐らく、ルナンはこれによって、同時に、イエスの伝記を書く筆者(伝記者)をも戒めているのである。

ルナンは、福音書記者が犯した誤りや、自分自身の経験(「イエス伝」を書いた経験)にも鑑みて、イエスの伝記を書く人は、自分の凡庸な精神から出た思想や感情を主人公のうちへ投影して(主人公におしつけて)、主人公を小さくする様なことがあってはならぬ、と戒めているのである。恐らく、これは、『イエス伝』を書く際に、彼が心に抱きつづけた「自戒」であつたであろう。

この様に解してよければ、この文章は「伝記者」に関するルナンの見識を示すものである。

ルナンによれば、「伝記者」は、主人公を自分のレベルまで引き下げ卑小化する誤りを犯しやすい。甚だしい場合には、自分の凡庸な思想、性格等々を主人公のうちへ投影して、結果的には、主人公を自分と一体化し、主人公をいわば自分のうちへ取り込んでしまう誤ちを犯しやすい。所謂「一体化(主人公との一体化)」の誤りである。「伝記者」は、主人公に傾倒のあまり、己れを失なう「一辺倒」に陥ってはならぬが、反対に、己れを主人公に押しつけ、主人公

のうちへもちこむ「一体化」に陥ってもならぬのである（所謂「一体化」の誤りについては、第十二章3節参照）。

4

遠藤周作氏は、彼が書いた『イエスの生涯』の中で、「私がこの伝記を書く視点」に触れている。遠藤氏は「視点」と呼ぶが、これは氏が主人公の「生涯を記す」（『イエスの生涯』を書く）際の根本的な立場（態度、姿勢）を示したものである。

さて、遠藤氏はまず、聖書がイエスの生涯を、どの様な視点（姿勢）で描いていたかを問題にし、それを明らかにしようとする。

氏によると、「聖書に書かれたイエスの生涯は、確かに一貫した真実をもっているが、一つ一つの事実という点では必ずしも正確には書かれていないのである。」⁽⁸⁾「聖書は、必ずしもイエスの生涯を事実通りに追っているわけではない。カトリック側もプロテスタント側もこのことは等しく認めている。」⁽⁹⁾例えば、ドイツの聖書学者「ブルトマンは、こうした聖書のなかの事実と創作との区分けをしながら、遂に『聖書のなかの史的イエスの姿はますます我々に遠くなる』と絶望的な言葉を洩らした。」⁽¹⁰⁾「そういう訳だから、たしかに、我々はイエスの生涯を正確にたどることはできぬ。事実の通りイエスの行動を記録することもできぬ。しかし、聖書を読む度に私たちが生き生きとしたイエスやそれをとりまく人間のイメージをそこから感じるのはなぜだろう。それは（聖書に描かれているのが）事実のイエスではなくても真実のイエス像だからである。」⁽¹¹⁾

では、遠藤氏のいう、聖書に描かれたイエスの生涯を「一貫した真実」、聖書に描かれた「真実のイエス像」とは具体的に何を指すのか——。これについて、氏は次の様にいう。

さて、「イエスの生涯をつらぬく最も大きなテーマは、愛の神の存在をどのように証明し、神の愛を（人々に）どのように知らせるかにかかっていたのである。」⁽¹²⁾聖書は、このテーマの為に苦闘するイエスの生涯を描いている。このテーマの為に苦闘こそ、イエスの生涯を「一貫した真実」である。そして、こ

のテーマの為に苦闘するイエスの姿こそ、「真実のイエス像」である。

(それが「生涯を一貫した真実」と呼ばれるのは、このテーマの追究が生涯を通じて常にその生きざまの根底にあったイエスそのひとの根本的な生き方であったからであろう。また、それが「史的イエスの姿」と区別して「真実のイエス像」と呼ばれるのは、それが彼の根本の生き方を生きるイエスそのひと〈全人〉を現わしているからであろう。)

畢竟、遠藤氏によると、聖書が人々に伝えようとしているのは、事実そのもの(イエスが生きた跡やイエスの事績)ではなくて、イエスの生涯を一貫した、イエスそのひとの根本の独得の生き方であり、更には、その生き方を生きるイエスそのひとなのである。

遠藤氏は、その『イエスの生涯』において、この様な聖書の視点(姿勢)に倣おうという。氏はいう。

「私たちが、これから語るイエスの生涯は、このテーマによって進められてゆくだろう。現実生きる人間の眼には最も信じ難い神の愛を証明するために、イエスがどのように苦闘されたか——それがイエスの生涯をつらぬく縦糸なのである。⁽¹³⁾」

結局、遠藤氏が『イエスの生涯』を書く際の「視点」(立場、姿勢)は、イエスの生涯の事実(行跡、事績)を述べることではなくて、イエスが、生涯を通じて一貫して生きつづけた彼独得の根本の生き方をこころを込めて辿り、また、それによって、その生き方を生きるイエスそのひと(「真実のイエス像」)を再現することである(第十二章5節参照)。

遠藤氏のこの様な「視点」(根本的態度)の底に、氏の「信仰」を思うと、氏がその為に、この『イエスの生涯』を書いた切実な希いがあることはみ易い。

その一つは、イエスそのひととの「出逢い」を確認したい(再逢したい)ということであったに違いない。だから、筆者が、イエスの生涯を一貫した生き方を述べ、それを辿ることによって、そこに現われる「真実のイエス(像)」は、他の人々の為というより、何よりもまず筆者遠藤氏自身の為のものである。氏

は、これによって、自分の信仰する（出逢った）イエスそのひとに再逢しているのである（逢って、イエスとの「出逢い」を確認しているのである）。

そして、もう一つの希いは、自分が信仰するイエスそのひとを、他の人々にも伝えたいという希いであつたに違いない。筆者は『イエスの生涯』において、イエスの生涯に互る彼そのひとの生き方を、またそれを生きるイエスそのひとの魂の真実を深い感銘をこめて述べることによって、自分が信仰する（そして再逢した）イエスそのひとを、他の人々にも感得せしめ、彼等が真実のイエスに出逢う「縁」を含んだ場を提示しようとしているのである。よりの確に言えば、他の人々がイエスそのひとを共感し感銘するに至る縁と場を提示しているのである（第十二章6節、第十四章参照）。

このような二つの切実な希いの源泉が、筆者遠藤氏のイエスに対する「信仰」であることはいうまでもない（第十二章4節参照）。

（「本来の伝記」の筆者の「原動力」「動機」〈希い〉と、主人公の「生涯を記す」という操作によるその「希い」達成の次第については、前章参照。）

5

今日、伝記の筆者が、それを書く原動力となったものや、それを書いた直接の動機について、自ら語ることは稀である。恐らく、今日の伝記の筆者には、その様なことを反省する余裕も謙虚さもないからである。とまれ、その稀な一つの例をあげよう。

高田博厚氏の『ルオー』（筑摩書房、1953）は、一風変わった伝記である。筆者は「飾ることは一つの罪である⁽¹⁴⁾」と、意識的にあらゆる飾りをすて、ルオーの、人間として画家としての生き方と、それを生きる彼のこころの動き（「生命の調和と秘密な音律」⁽¹⁵⁾）のみを記しているからである（第十二章の註8参照）。これは簡素を通りこして、いわば骨格だけの伝記である。これについて筆者高田氏は、「ジョルジュ・ルオーで、私は彼〈ルオー〉の伝記や作品紹介に重点をおくよりも、ルオーの一生とその作品を通して、人間存在の極限状態をうかがった⁽¹⁶⁾」という。

さて、高田氏がこの様な『ルオー』を書く原動力となったのは、何であろうか――。

これに関して高田氏は次の様にいう。「もし私が、あなた（ルオー）の芸術や生涯を分析し総合して、秩序のなかに系統づけようとしたり、或はあなたの存在の秘密を解けるなどしたら、どれほど自分を恥じることでしょう。」⁽¹⁷⁾

これによってみると、この伝記は、ルオーの人や芸術を理解しようとのところから生れたものではない。まして、ルオーを批判しようとのところから生れたものではない。では、いかなるところからか——。氏は次の様にいう。

「これ（『ルオー』）はルオー批判ではなく、私の三十年間のフランス生活における内省の果実で、謙虚と熱意をもって書いたものであり、ルオーへの私の感謝の言葉である。」⁽¹⁸⁾

ここにいう、ルオーに対する「謙虚と熱意」と「感謝」の源泉にして、同時に高田氏の生活の根源となったものこそ、高田氏にこの伝記を書かせた原動力に違いないが、氏はその「源泉」について、素朴な言葉で次の様にいう。

「あなた（ルオー）よりずっと遅れて世に生れてきて、私もまた幸福な運命によって、あなたと同じ道に就きました。そして私はただ、私の出来る限りにおいて、あなたに近づきたいのです。あなたが、日ごと日ごとに「神」——この極限の言葉をいうことは、まだ私には禁じられている——に近づかれるように。

この書はそれの謙虚な一つの証に過ぎません。」⁽¹⁹⁾

高田氏のこのような心情は、ルオーへの傾倒（人間に対する人間的信仰）という他はない。『ルオー』は、その「傾倒」の証である。

——未完——

註 十二

(1) 小論は、「伝記論」であるから、その窮極の目的は、伝記論の立場で、「本来の伝記に関する三つの基本的問い」に答えることである。

その「回答」がもつ哲学的人間学的意義の究明は、別個の研究に俟たねばならぬ。

(2) 例えば、先に「自己目的的・自足的伝記」の実例としてあげたクセノポンの『アゲシラオス』伝の場合も、筆者のころには、アゲシラオスの徳を讃えるという、所謂「頌徳文」的な狙いが混入していた（前出拙稿、「伝記者のころ」第二章2節参照）。

- (3) 今日、世に行われている各種の伝記(小論第三章以下で検討した各種の伝記)は、図式的に言えば、この様にして(「本来の伝記」が、その自己目的・自足性を喪って)成立したものと見える(後述第十六章参照)。尤も、今日の各種の伝記に、その様な成立の直接の痕跡をみることはできない。

近年公刊された『伝記の魅力』(吉川弘文館)は、今日の伝記の筆者の、「伝記」に関する随筆をあつめたもので、これをみると、今日の筆者が伝記を書く原動力となったものが、如何なるものであるかがよくわかる。そこにみられる「原動力」は様々だが、「本来の伝記」の筆者のそれ(「主人公との出逢い経験」)に類する底のものはみられない。また、それとのかかわりの跡、即ち、各種の伝記の上述の様な成立の直接の痕跡を示す様なものは何も見当らぬ。

- (4) ある西洋古典の専門家は、われわれが「本来の伝記」の実例の一つとして、その成り立ちや構造を究明した、クセノポンの『アゲシラオス』伝(前出拙稿、「伝記作者クセノポンの経験」、「伝記者のころ」第二章等参照)にも、そうした「一体化」がみられるという。『アゲシラオス』も、クセノフォン自身の半生記の趣きをもつものであり、……伝記作者が間接的に自らの人生と思想を伝記の主人公に投影して語っている場面にもであることとなる。(「古典古代における伝承と伝記」140—141頁)

- (5) 例えば、ロマン・ロランの『ペートル・ヴェンの生涯』の場合も、ロランの本来の希いが、『ペートル・ヴェンの生涯』刊行当時の社会情勢等に影響されて、「人々に救いと友を与える」という希いに、或は「ペートル・ヴェンに感謝を捧げる」という希いに変貌していた(小論、8、9章参照)。

その様にはっきりしたかたちをとらなくとも、基本的には「自己目的・自足的」と見える伝記の中にも、「主人公のモニュメントを残そう」とか、「主人公を偲ぶよすがをえたい」という様な、本来の希いとは異なった筆者の希いが垣間みられる場合が多い。

- (6) 小論第四章「好事家的伝記」の註(9)、前出拙稿、「伝記者のころ」第四章3節及び第五章参照。

- (7) 「伝記」といえば、普通、ある実在の個人の行跡、事績を記したものと解されている。国語辞典、漢語辞典等でも「伝記」を次の様に解説している。

「ある(実在の)個人の生涯の事跡を書きつづけたもの。」(『国語辞典』岩波)

「個人の(一生の)事績を伝える記録。一代記。」(『漢語辞典』岩波)

- (8) かくして、「本来の伝記」に記される主人公の「思い」や「心の動き」は、単なる「事実」ではない。主人公そのひとのいのちに対する筆者の共感がこもった主人公の「魂の真実」である。(筆者の共感がこもって「事実」が「真実」となる際に、「事実」が変容する場合もある。ロマン・ロランは、そのことを認め告白している。<『ペートル・ヴェンの生涯』p. 12>)

また、こうして、「本来の伝記」の叙述は簡素になる。そこでは、主人公の生き

方とそれを生きる主人公の魂の真実のみが問題であるから、——例えば「頌徳文」にみられる様な——それと関係のない枝葉末節の事実や飾りは意識的に削りとられ、また、——「文学的伝記」や「歴史的伝記」にみられる——文学的価値や史料的価値をもつだけで、生き方とかかわりのない事実も削りとられるからである。

しかも、そこには、主人公の生き方、また、それを生きる主人公の「魂の真実」に対する筆者のいのちをこめた深い感銘が込められるから、「本来の伝記」の叙述は生氣をおびる。「本来の伝記」の叙述のこの様な生氣をおびた簡素さは、例えば、ルオーやセザンヌの絵の簡素さに準えることができようか——。

- (9) 主人公の「生涯を記す」とは、その半面で「主人公の身になって彼の生き方を辿ること」また、生涯を生きる主人公のいのちを共感することだといったが、ここに「主人公の身になって」とか、「共感する」とかいうのは、主人公に一辺倒になることでも、反対に主人公と一体化することでもない。所謂「一辺倒」は、筆者が自己を喪って、主人公のうちへ引き入れられること、反対に「一体化」は、筆者が主人公のうちへ自分の思想、感慨等々を投影して、結果的には主人公を自分のうちへ引きこむことである。「主人公の身になって」とか、「魂の真実を共感する」とは、右の何れでもなく、伝記の筆者が、「出逢い経験」の強い緊張の中で、自分のみる立場、傍観者的立場等々を抜け出して、筆者自身が「人間」「自立者」「ひと」「魂」となり、主人公の「人間」「自立者」等々に対し、しかもその対立を止揚して、全人をあげて主人公に直接することである。これに対して、「一辺倒」や「一体化」は、主人公との出逢いに伴う筆者のこころの強い緊張が喪われて、筆者のうちに、いわば「出逢い」のこころの殻だけが残存して、主人公との対立をのり超える替りに、それを排除するために生じた姿勢と解される（第十三章1節2節参照）。
- (10) アンドレ・モーロワは『伝記の諸相』(André Maurois, Aspects de la Biographie, 1928)の中で、「伝記作家の義務は、すべての資料を読みつくすことである」といい、他方、「伝記作家は、主人公の心の裏表をよく知っていて、それをもとに、かの資料から主人公の個性的人物像を描き出す文学者でなければならぬ」という（後述、第十七章参照）。
- ここには、われわれが「本来の伝記」の実例についてみてきた、「生涯を記す」という操作の両面が正確に捉えられている。即ち、「伝記」の筆者は、一方、資料によって主人公の行跡、事績等を確かめ、他方主人公の様々の「思い」「心の動き」をよく知っていて、それによって、行跡、事績等を捉え直し、それを裏打ちして、固有の生涯を生きる主人公の全体的人間像を描き出すべきことが強調されている。
- さすがに、すぐれた伝記作家の伝記作家への忠言である。
- 然し、この忠言は、伝記作家の技法（伝記作成法）を偏重し、本来の伝記者のこころ（「生涯を記す」際の伝記者独得の希い、独得のこころの高まりと緊張）を見落している様に思われる（小論第十七章参照）。
- (11) 主人公の行跡や事績や様々の思いや心の動き等を、ただみて記すのは容易であ

る。然し、「生涯」を記すのは難しい。「生涯を記す」には、ここにみてきた様に主人公そのひととの出逢い経験に伴う心の強い緊張が保たれていなければならないからである。(その「緊張」はしかし緩み易い。そして、それが緩むと、筆者は容易に、かの「一辺倒」か「一体化」に陥る。そうでなくても、主人公に対して、第三者的、傍観的態度をとる様になる。また、原動力が不純化し変容して、各種の伝記になる<第十六章参照>。)

ひととひととの出逢いは稀なことである。「出逢い」経験に伴う心の緊張が保たれるのは更に稀である。だから、「生涯を記す」という操作が、ここに述べた様に、こころをこめて行われることはごく稀にしかおこらぬ(「本来の伝記」は稀にしか現われない)。

「伝記」が、どの様な筆者によっても、どの様な主人公についても書けると思ったり、実際に、いろいろな主人公について、所謂伝記を書きなぐったりする人々は、「生涯を記す」ことの厳しさを思わぬ人々である(第十六章参照)。

- (12) もし、「本来の伝記」の筆者が、主人公の「生涯を記す(伝記を書く)」ことによつて——たとえ、いかほどこころをこめて書くにせよ——、自分が出逢った主人公そのひととを、読者に、直接そのまま伝える(共感させる)ことができるかの様に思ったとしたら、それは筆者の思いあがりというべきであらう(第十二章6節の2、第十四章参照)。

「伝記」の筆者がなしうるのは、読者に対して、主人公との出逢いの場(出逢いの幸運にめぐまれる縁を含む場)を提示することのみである。(例えば、ロマン・ロランの三部作の中にも、ロランのこの種の「思いあがり」を感じさせる箇所がある。——前出『ミケランジェロの生涯』、岩波文庫、134—135頁。なお、後述第十四章参照。)

- (13) ここに示したのは、典型的な「本来の伝記」の基本的な成り立ちであつて、「本来の伝記」と呼ばれてよい伝記が、いつもこの様な成り立ちをもっているとは限らない。尤も、それらの伝記の成り立ちのみならず、ここに示した「基本的成り立ち」の変種と解しうる(第十六章参照)。それに、ここに分析して示したのは、「基本的成り立ち」の、いわば骨組にすぎぬ。筆者が「本来の伝記」を書く「原動力」、「直接の動機」、「操作」は、実際には、また細部では、もっと複雑な構造、内容をもっており、不純な要素や余分な要素も含んでいて単純ではない。

畢竟、この章で、実例について考察し、分析して示したのは、総じて、「伝記」が筆者のこころ(人間精神)から生れ出る際の「基本的な成り立ち」であり、また、その「骨組」にすぎぬ。

十三

- (1) ハロルド・ニコルソン(Harold Nicolson)は、イギリスの伝記文学の研究者。次の様な著書がある。

The Development of English Biography(The Hogarth Press, London, 1927)
なお、ここに引用された彼の言葉は、次の書中のものである。

H. Nicolson, Die Kunst der Biographie und andere Essays. Berlin und Frankfurt am Main, 1958, S. 24f.

- (2) リットン・ストレチー (Lytton Strachey<1880—1932>) イギリスの伝記文学者、『ヴィクトリア女王』、『エリザベスとエセックス』等の著作がある。
- (3) ジョンソン博士 (Samuel Johnson)、18世紀イギリスの文学者、『英語辞典』を編纂し、『イギリス詩人伝』の著作がある。
- (4) ここにあげたジョンソン博士の言葉も、註(1)にあげたニコルソンの書 (Die Kunst der Biographie und andere Essays) に引用されたもの。
- (5) 『ブルクハルトの思考におけるヨーロッパ的視界』(坂井直芳訳、『ブルクハルトとヨーロッパ像』、みすず書房) pp. 97-98
- (6) 尤も、ケーギがこの様な文章を書いた直接の目的は、ブルクハルトと英語世界との関係を考察するのは、一見ブルクハルトを不利な光の下におくことになるので、その点を読者に言い訳することであったと思われる。
実際に、ブルクハルトの著作で公刊されたものでは、イギリス史乃至北米史を扱ったものは一つもない(『ブルクハルトとヨーロッパ像』p. 100)。とにかく、「ブルクハルトの精神において、イギリス又は英語世界は何を意味したか」と問うことは、「恐らくあまり有利でない光の中に彼(ブルクハルト)の姿を移す」ことを意味する (ibid. p. 100)。
- (7) ケーギのこの文章の真意については、小論第六章、註(44)、前出拙稿「伝記作者クセノボンの経験」IVの附録第二参照。
- (8) ルナン、『イエス伝』(津田稔訳)、岩波文庫、367—368頁。
- (9) 遠藤周作、『イエスの生涯』、新潮文庫、48頁。
- (10) 同上、47頁。
- (11) 同上、48頁。
- (12) 同上、49頁。
- (13) 同上、51頁。
- (14) 高田博厚、『ルオー』、筑摩書房、62頁。
- (15) 同上、4頁。
- (16) 同上、120頁。
- (17) 同上、4頁。
- (18) 同上、120頁
- (19) 同上、5頁。